

「苦潮世」への の旅路

奄美近現代の出稼ぎ・移民考④



第1回 近代日本・売られゆく貧者の群れ 5/25



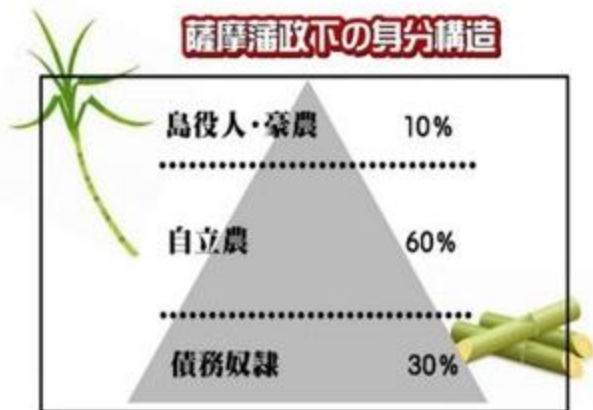
COALING TO STEAMER SHIP WAGARAZI HARBOUR. 1870年代前半の島原

カラユキさんと ヨーロン人

明治初中期、島原半島・口之津港は外国船への石炭積み出し港として殷賑を極めていた。その船底には密輸される天草・島原の少女たちが息を潜めていた。同時に船には「ヤンチョイ」と呼ばれる石炭の荷役作業に、与論島から集団移住した最下層の農民が動員されていた。貧困ゆえに絶望的な運命を担わされた両者。「島原の子守唄」を通してその出会いを考える。

review

第2回 「砂糖島」奄美の歴史と貧窮 7/27



※西郷隆盛は1859(安政6)年、奄美大島龍郷村に塾居を命じられるが、島における苛政を盟友大久保利通にあてた手紙で「島の体、誠に忍び難き次第に候。松前捌きより甚だしきに候」とアイヌ以上の苛政だと怒っている。

薩摩藩が強制した黒糖生産は、唯一の換金作物として長く奄美社会を規定した。

米に代わる換糖上納で島土が疲弊し、旱魃・害虫被害・悪疫が続き、「ガーシヌ(餓死)世」を招いた。1755(宝暦5)年の大飢饉では、徳之島で餓死者3,000人(『徳之島前録帳』)の惨劇に。しかし薩藩はむしろ収奪を強化、宝暦12年の奄美大島の租税率は73%に。

この結果、徳之島では藩内唯一の母間騒動(1816)、犬田布騒動(1864)の一揆を誘発。重税で農民の逃散、豪農への身売りによる債務奴隷(ヤンチュ=家人)化が進み、全人口の約3割にも達した。

「砂糖世」から「出稼ぎ世」への顛末



■ 薩摩藩は慢性的な財政窮乏を奄、美の砂糖専売制で乗り越え、幕末には軍事で雄藩化、明治維新の立役者になった。

■ しかし、その代償として島民の疲弊著しく、凶作や飢饉、伝染病で餓死者が続出。潰れ村や一揆が発生、重租に苦しむ農民は豪農に身売りし、約3割が債務奴隷「ヤンチュ」に転落した。

■ 維新後、砂糖自由売買闘争で島民側が勝利するも過当競争による「メーデー(前代金)」借金潰けに。また新政府による解放令後もヤンチュ解放は遅れ、近世の貧窮が近代に継がれる結果に。

■ 与論島では台風による被害による飢饉が生じた明治32年、奴隷的存在の1,200人が、三池炭鉱で作業人夫として集団移住、かの地でも搾取と差別に苦しんだ。

■ 以降、奄美では飢饉のたびに貧窮者が排斥され、東洋のマンチェスター・阪神へ出稼ぎしたほか、海外移民が相次ぐように。

第3回 大正恐慌と人口流出 9/21

奄美から阪神・京浜への
移住者数(県統計)

1900年	1,203人
1910 (M43)	5,221
1920 (T9)	20,869
1927 (S2)	56,109

離郷者の心情(現代との違い)

「故郷には傾いた家と、幾段幾畝の畑と、永い苦闘の思い出とがある。しかし、家も畑も売り払った。家財残らず人手に渡して了った。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思いっきりの供え物を捧げてお別れをして来たではないか」(ブラジル移民の体験を描いた石川達三『蒼氓』から)

流れ出る 赤貧者の群れ

1891(明治24)年、奄美全村の補助で大阪商船の朝日丸(300ト)が月1回各島間を結び定期航海、関西航路に接続し、鹿児島、関西との往来が可能になった。

これ以降、一般島民の各島⇒名瀬⇒本土への移動が始まり、明治末から“日本のマンチェスター”に変貌した阪神の繊維・重工業地帯へ、赤貧層が糧口を求め出稼ぎ、名瀬で一時滞留後、すぐに本土へ渡る流れが加速した。

『徳之島町誌』は「(昭和恐慌が始まると)農地の少ない農民や運転資金のない人は、わずかな農地や家具を売り払い、京阪神工業地帯へ出稼ぎに行った」と記す。そのピーク、昭和2年の大島郡寄出人口(外国を含む)では転出者4万人を超え、人口比で「**亀津村58.4%**」が際立っている。

与論島からの口之津集団移住

島民大移動時代の幕開け

明治31年8月、与論島を猛烈な台風が直撃。家屋の大半が倒壊、続く旱魃、伝染病で死者累々の生き地獄に。当時、三井が長崎・口之津港での人夫を募集中で、大島島庁が全面協力、翌32年から13-30歳の240人を1陣に、総勢1,260人(沖永良部島、徳之島含む)が**集団移住**。島民は「与論口」と呼ばれ、出航を急ぐ外国船には、3日3晩不休の石炭搬入に動員された。

島民は明治42年、三池港開港で大牟田に移動するが、与論長屋に隔離、地元民からも「ヨーロン」と侮蔑され、低賃金を強いられるなど、**最下層労働層・被差別集団**として苦しみに満ちた異郷での生活を強いられた。



与論島民の移住で、真っ先に対象になったのは農奴「ンダ」(膝素立)。「ピゼン(肥前)は寒くて子が育たん」と嫌がる島民を「3年働けば無代解放」と謳い、半強制的に島外へ。結果、「(移住で)ンダの種族は全く消え去った」(『与論島郷土史』)。血を分けた同族への厳しい追放劇、口減らしが行われている。

惨めな
『第二の郷土』





川重神戸。今は潜水艦建造に特化。

阪神工業地帯への進出

明治末から大正・昭和、さらに戦後にかけて、奄美出稼ぎ者の最大の受け皿は阪神だった。大阪湾岸沿いの海拔ゼロメートル地帯に集住し、紡績女工、造船・製鉄工員として、言葉や生活文化への偏見に苦しみながら、郷友会を組織、励ましあって生き抜いた。

IV: 検証「奄美出稼ぎ世」



奄美からの出稼ぎ・移民が、蔑視・差別によって、自らの出自をひた隠しにするほど大都市・海外で苦悩し、辛酸を舐めたのは何によるか。少数・弱者を軽んじ、言語を含め、地方の独自文化を嘲笑する社会風潮はなぜ生じたか。今日、そうした弱者・少数軽視は消滅したか。外国人労働者差別、社会的弱者に対する偏見を含めて、社会の在り方を考える。

大牟田の与論長屋。
元住人らが久々に
訪問(1962年9月)



与論島民の集団移住

口島民による島民排斥

◆明治4年の賤民廃止令⇒主家側は身代糖1,500斤要求、解放進まず(与論島では解放令から27年後も違法な奴隷制続く)◆飢饉対策として人口の約3割を占める下層民追放による口減らし策の強行◆移住団を束ねた戸長・上野應介や娘婿・東元良は大地主・富裕層で、移住後は労賃から報酬を得る中間搾取者。低賃金に反発する島民に「三井さんはわがおとうさんおかあさんじゃけん、金の問題じゃなか」(東)と説得→植民地における馴化政策(西インド諸島植民地との類似)

口行政の強権的対応

◆大島島司、わずか災害2カ月後での移住強行◆甞島飢饉(明治21年)時の、種子島集団移住政策との格差◆口之津から三池移動時の県の強権的対応(「万一今後此の決定に不服とか苦情を申す者ある時は、一切無関係な態度を執らるるも知れざる…」(県民救護の欠如)◆明治21年から島庁費の「分別経済」施行→奄美一層の貧窮化

口三井の雇用責任

◆「三池で特筆すべきものに二つある。一は囚徒使役、他は与論人夫」(『三池鉱山五十年史稿』)と三井自身はその効果を評価◆「囚人以下に置かれたことは、非日本人扱いに他ならない」(武松輝男)◆「与論島労働者は賃金不満を口にただけでも脅されたり、暴力をふるわれ抗議できなかった」(田中智子)

口地域社会・言論の差別

◆東可梯さん「三池在住の時はその強い差別を受け、子供の頃は土地の子供から『ヨーロンが来た』と侮られ、敬遠された」◆「三池港に与論長屋という珍妙な長屋建ての一部落がある。…便所があっても糞尿は溝の中に垂流し、沐浴は二カ月三カ月も垢に染まり…」(福岡日日新聞)

本土における差別

イ) 島民を苦しめた蔑視

辺境の蔑視・戦前の純血思想…奄美アイ
又同源説、奄美独自の言語・風習…工員
募集で「大島人お断り」貼り紙

▼神戸の沖永良部島出身者「私は小6でしたが、島から上神して来た老人が、バシャ布と草鞋履きで、よく道路で立ち話してましたが、友達から『島人』と馬鹿にされたことがあります」。

▼同じ小3時の移住者「遊びに来た友人に『君の国は鹿児島や云うとったけど、本当はXXやろ』と言われショックを受けた」

ロ) 揺れる郷友会活動

▼沖縄県人会=窮地の沖縄女工の救済へ、工場へ乗り込み待遇改善要求(葬儀引き受けも)…神戸の奄美人(企業内郷友会)=多くが雇用優先、「労使協調」型(1930年の神戸徳州会の活動方針「労働争議は絶対参加しない」)…しかし差別の解消進まず(神戸・川崎造船の奄美中部会会長・森山茂芳氏「吾らの受くる誤解に基づく侮蔑を子孫に伝ふることなきを切望」)の訴え

▼企業内郷友会での活発な「思想善導」→(神戸での名瀬出身弁護士の講演=工員としての限界、女工の笑売婦転落を指摘し「満州で人生再建を」)●成功者の視点・郷土青年の救済からほど遠い訓話…`低い島民の地位、への自虐反映



「妻は赤子をあやす手つきで私をふとんの中に入れ、『クヘサ、クヘサ、アンマー』と郷土のことばで死んだ母親に訴え、声をしぼって泣き続けた」(島尾敏雄『日々の例』)。島尾ミホは誇り高いノロの血筋で、戦後、島尾と結婚し神戸へ。義父らに「土人扱い」され、そのショックもあって後に精神を病んだ。



人口政策と行政介入

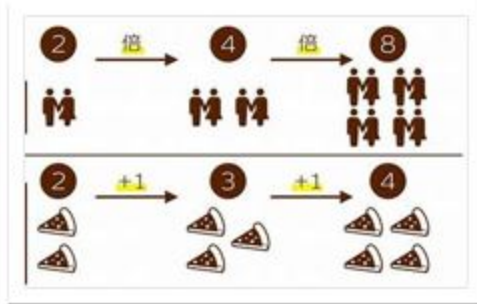
イ) 飢饉と人口調整

「人口は多く、土地は狭いか」(京都大「ブラジル移民実態調査」1955)

◆ 奄美の移住・移民の背景→ 餓死への恐怖体験、「人口増加」への過剰反応

与論島の口之津移住、宇検村からのブラジル移民・満州開拓→ 適正人口の名目下に▼戦後も「復帰の父、泉芳朗が返還後の施策の座談会で「人口はどうしても15~16万人にして7、8万人は出さなければならない」と発言。

◆ 世界では「マルサスの罠」(経済学者マルサスの人口論)以降、人口増が貧困層を増し、食糧危機を招くとの説が有力視されたが、産業革命で逆に流通市場が拡大、人口増が経済活性化を生んだ。奄美の繰り返された人口調整意識が今日の過疎、限界集落の増加に繋がった側面も。



ロ) 公的機関の介入

民間の人材募集は通常、募集人が当たり、移民も斡旋会社が希望者と直接交渉。しかし奄美では行政が介入する特異な事例が目立った。

宇検村ではブラジル移民に村役場がとりまとめを担い、満州への分村計画でも大林村長自身が渡満し開拓地を視察、第一陣を送り出した。「官民一体の移民送出システム」(宮内久光)。

与論村でも口之津移住の禍根を残しながら、昭和3年、山喜村長が南洋興発支配下のサイパン・テニアン島を視察、移民送り出しに奔走した。

公的機関の介入は、希望者や採用側には安心・便利な反面、国策に追随し民意が顧みられず、移民が棄民化した現実や、敗戦時引き揚げなどで犠牲を伴った。

国家による「切り捨

||

化外の地

- 大和朝廷は種・屋久から南の南西諸島を「化外」に位置づけ、ヤマトから分断、国家の外に置いた。

薩摩支配

- 島津氏は1609年、琉球国に侵攻、奄美群島を割り取った。以降、明治維新まで280年間、砂糖植民地化し、島民を支配、搾取した。

外地扱い

- 近代も琉球処分で独立国家を解体しながら、沖縄・奄美を時には植民地扱い、異化と同化の差別政策を強いた。今も島々には本土を「内地」と呼ぶ習慣が残る。

戦前・戦後差別

半日本人	出稼ぎ者の植民地民扱い
非日本人	戦後の国外退去命令
非琉球人	沖縄での奄美人追放



昭和天皇は二度、沖縄・奄美を「切り捨て」た。一度は、天皇の決断で沖縄戦を回避できたのにそれをせず、沖縄を捨て石にして地上戦で地獄に晒した。二度目は共産化を恐れ、米軍基地造設に、自らの延命と引き換えに沖縄・奄美を提供した。この結果、両地区は戦後日本経済の復興から取り残され、苦難の歴史を戦後を歩まされた。

歴史の教訓に 学び、主体的 な島づくりで 明日へ！



沈鬱な歴史のトンネルを潜り抜け、1世紀に及ぶ出稼ぎ・移民体験、戦禍を経て、奄美島民は21世紀に入り、ようやく自らの出身地を堂々名乗るようになった。

そうした自信回復は島唄文化が若者たちによって支持されて発展的に継承され、あるいは2021年7月に世界自然遺産に登録され、自然が脚光を浴びたことが大きい。

しかし、侮蔑された歴史も、自然への評価も、相対的なものであって、再び歴史が暗転することはない、と誰も断言できない。そうした不安を払拭し、希望を次代に継ぐためにも、「主体的な島づくり」こそが何より大切であることを学ぶべき。

「まとめ」にかえて

コンビニで働く外国人女性



苦難の歴史に学ぶもの…

差別追放と 世界との連携を！

「出稼ぎ世」から、今日の奄美が向き合い、訴えるべきは何か。

1)過去の被害から復権を

与論島民への搾取・差別は今日も企業責任を問うべき側面を有している。トラウマ、PTSD対処に、事実をさらに掘りおこし、問題を現代に問う声を。同様、大正期の阪神移住者への差別も、都市の持つ負の側面を今日的テーマとして俎上に。

2)外国人労働者への差別解消を

日本の外国人労働者数は200万人を突破した。しかし、偏見、賃金差別、入管法の強圧が問われている。今日の日本は沖縄・奄美など移民の送金で窮状を凌いだことを忘れず、外国人労働者が働き甲斐のある国造りを。またマイノリティに対する「出ていけ」などの暴言、ヘイトスピーチを根絶、思いやりと信頼が寄せられる国家に。歴史体験からそうした問題に奄美・沖縄住民が運動の積極関与を。

3)新たな難民・弱者への対応を

飢饉や難民への支援とともに、貧困(子供・女性)、弱者(独居・寝たきり老人)など、時代から排斥されつつある「新たな難民」への理解と、救済の声を。

民族・宗教・国家…分断煽る超大国

トランプ勝利…移民再び 冬の時代、

アメリカ大統領選の結果、共和党・トランプ氏の返り咲きが決まった。「女性」「移民」問題が選挙を左右したとも言われている。時事通信は解説で、トランプ氏の「米国第一主義」が通商や安全保障で同盟国と摩擦を生むのは避けられないとし、一期目のように権力を濫用すれば、米国を復活どころか、衰えを加速させかねないと警告している。



選挙期間中、トランプ氏は「移民問題」で「奴らは犬や猫を喰っている」「刑務所や精神科病院から来た連中」などと憎悪のデマを続けた。当選後は「国境の壁を増やす」と発言。移民問題はアメリカの反応がヨーロッパに伝染、国家主義を生み、さらに日本でも暴走する恐れがある。移民、外国人労働者の冬の時代が強まる恐れがある。

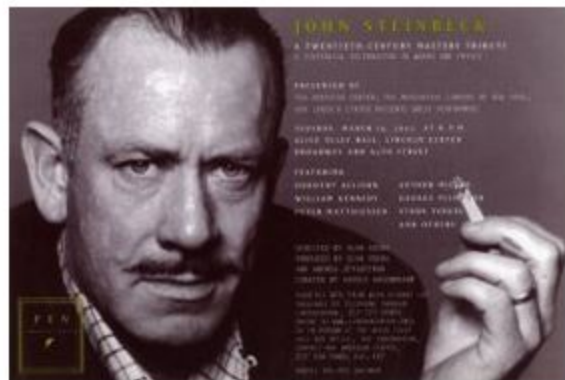


Epilogue

「怒りの葡萄」

「怒りの葡萄」
スタインベックの世界

ジョン・スタインベック (1902-1968) 小説家・劇作家で「アメリカ文学の巨人」と呼ばれた。生涯で27冊の小説、ノンフィクションを発表、1929年の経済恐慌時の貧窮にあえぐ小作農民の姿を描き、ピューリッツァーを受賞した代表作『怒りの葡萄』は1400万冊を販売。1962年にノーベル文学賞を受賞した。



「出稼ぎ 農民の苦 悩と、再 起への祈 り」描く



世界恐慌下の1930年代、機械化による大規模農業の進展で、アメリカの穀倉地・中西部で砂嵐が深刻化し、流民となる農家が続出、社会問題化した。そうした中、オクラホマの農家の子息で主人公のトムも故郷を追われ、仕事を求めて一家でカリフォルニアへ。旅の過酷さに耐え切れず、祖父母が死亡。しかも新天地は労働力過剰になり、希望は打ち砕かれる。“オクラホマ野郎”と蔑まれながら、キャンプ地を転々し、低賃金で働くはめに。労働運動を始めた仲間が殺され、怒ったトムはその警備員を殺害して地下に潜伏。家族を次々と失う一家のキャンプ地に、こんどは豪雨と洪水がやってくる。
(「[wikiwand](#)」から)

スタインベックの世界観

★奄美出稼ぎ世と同様な時代背景

○大正・昭和初期の世界恐慌による農産物価格暴落、資本による大規模農業化と地力衰退、災害誘発…

★資本主義経済の人間不毛への怒り

○大恐慌下のアメリカ社会が貧しい人々を生みだし、彼らを貧しさの中に押し止めておこうとする、容赦の無い経済システム、政治の無能さへの憤り、告発…

★宗教と弱者への共感・連帯

○スタインベックはキリスト教文学、聖書に大きな影響を受けた作家。後年の『エデンの東』にも顕著だが、一家の新天地を目指す旅は、モーゼに率いられたイスラエル人の「出エジプト記」を髣髴とさせる。

★希望と再生の物語

○ラストは、嵐で死産したトムの妹が、死にかけの男に母乳を与える。大雨と洪水は、聖書の「ノアの箱舟」が示す神の怒りの象徴。小屋に逃げ込んだ一家は、少ない食糧を息子に与えて衰弱し死にかけた男に、子どもを死産したばかりの妹が母乳を与えて救う。その行為は、命の新たな再生、循環への期待をうかがわせる。



巨匠ジョン・フォードが映画化し反響
（「ダストボール難民」を描く）





主人公トムの言葉

なぜって、あの男のもっているちっぽけな魂のかけらは、残りのものと一緒になって、完全に一つにものにならねえ限りは、なんの役にもたちゃしねえからよ。

トムが家族の元を去る際にママに言うセリフ。労働者を組織して殺害された説教師ケーシーが「過去に言っていたことがやっと分かった」、とトムは言う。それは1人はちっぽけで無力だが、団結によって弱者は「強さ」を手に入れる、という気づきだった。



奄美の出稼ぎ・移民が見せた、大都市の片隅での集住、郷友会の組織化も生き抜く知恵、防御生態だったが…。

出稼ぎ・移民とは何か…次代を見据えて

戦争や迫害、さらには奴隷になったため、「移民」となることを余儀なくされた人たちは、昔から多かった。彼らは、苦労もあったろうが、移住先で自らの技術・文化などを伝え、社会そのものを新たに変貌させることに貢献してきた。世界史とは、こうした移民が築き上げたものの集積といっても過言ではない。

(玉木俊明『世界史を「移民」で読み解く』)